
memory

銀翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

memory

【コード】

N1350B

【作者名】

銀翠

【あらすじ】

部屋の片付けをしていると、色々な思い出が出てくる。その思い出たちの中、僕は一番大事な思い出を思い出してゆく。

僕は今、部屋を掃除している。小学一年生から高校三年生の現在まで、ずっと使ってきた部屋だ。思い出はたくさんあるし、愛着のある部屋だ。僕はあと一週間程で高校を卒業し、東京の大学に通うために東京で一人暮らしをしなければならない。大体のことは済ませているので、後はやる事は部屋の片付けなのだ。あんまり物が多い部屋ではないけど、机の引き出しの奥には様々な思い出が残っていた。

始めに、小学校のときに好きだった子に書いたラブレター。汚い字で、あの頃の僕の気持ちが書いてある。結局ラブレターは出されることがないまま、引き出しの奥に眠った。「懐かしいなあ…」あの頃は好きな女の子をいじめてたっけ。今思うと少し胸が痛む。

次は、将来の夢と書いてある作文、これは中二で書いたものだった。さつきよりはきれいで、それでも汚い字で書いてある。「え」と…僕の将来の夢は、医者になって苦しんでいる人を助けたいです。か…」僕はあの時のことを思い出す。「そう言えば、僕が医者を目指すきっかけは…あの人がったな」それは僕の中一の一番大事な記憶。

中学一年の秋頃、僕は盲腸で入院した。遊び盛りの中一には、入院はつまらないものだった。入院から三日目、病院の屋上に行くと、手すりに寄りかかっている女性がいた。この時の僕には、その女性の思いつめた感じなど分からなかった。だから普通に話しかけた。「こんにちはっ」女性は声に気づいてこちらを向いた。「こんにちは」微笑んで返してくれた女性に、僕の胸はときめいた。今思えば、青かったなあと恥じる。

「何をしているんですか？」どう見ても年上なので、敬語を使う。女性は答える。「町を眺めていたの」僕も横に並び、町を見渡して

みた。「きれいでしょう?」「はい…」自分が住んでいるいつもの町には見えなかった。少しの間、僕は風景に見入っていた。「いつか私も…」見入っていたから、女性の咳きは全部聞き取れなかった。「何か言いました?」「ううん、なんでもないの」女性は首を振る。僕は疑問に思ったが、邪魔になっただら悪いので、病室に戻ることにした。「邪魔しちゃってすいません、僕行きますね」「邪魔だなんて…また来てね」女性の微笑みはすごく綺麗だった。

病室に帰り、だらだら過ごす。それでも、頭にあるのはさっきの女性のことだった。歳は19ぐらいかな?身長は160ないぐらいだろう、髪は長くてさらさらしていた。そして、女性の微笑んだ時のあのきれいさは、僕の心をわしづかみにしていた。色々と思いをめぐらす。あの人のことをもっと知りたいな、明日聞いてみよう。そんなことを考えていたら、気づいたら朝になっていた。どうやら寝てしまったようだ。そんな訳で、今日も屋上に行く。昨日のように、女性はそこにいた。「おはようございます」声に気づき、こちらを向く。「おはよう」昨日と同じ微笑み、僕は胸が高鳴った。横に並び色々質問してみる。「お姉さんはいくつですか?」「唐突な質問に、女性はちゃんと答えてくれた。「私は16歳よ、君は?」「僕は13歳。お姉さんって大人びて見えますね」「そうかな?よく言われるけど…なんでそう見えるか教えてくれる?」「ふいんきが落ち着いてる感じです」女性はくすつと笑う。「ふんいき、ね。私は落ち着いてなんかいないんだけどなあ…」ふう、とため息。僕は間違いを指摘されたので赤くなっていた。それでも、質問はする。「お姉さんはどこが悪くて入院してるんですか?」「私は…」女性は言葉に詰まる。聞いちゃいけないことを聞いたかな、と黙っている。「私は頭が悪くて」と笑いながら言う。「そうなんだ!?じゃあ僕一生入院しないと…」真に受ける僕。女性は、あははと声を出して笑う。「面白い子だね。君、名前は?」「僕は行成つて言います。お姉さんは?」「私は小雪、よろしくね行成君」「はい、よろしくです小雪さん」僕はなんか嬉しかった。それからきとくに話し、

僕らは別れた。すごく楽しい時間だった。

次の日も、その次の日も、僕は小雪さんと話していた。そして入院してから七日目、僕の退院の日だった。正直、小雪さんと別れるのは寂しかった。僕は最後に屋上に行った。そこに小雪さんはいなかった。「あれ？」僕は受付に行き、小雪さんの病室を聞いた。看護婦さんは病室を教えてくれなかったが、小雪さんから僕宛の手紙を預かっていたらしく、それを受け取った。すぐに読みたい気持ちを抑えて、家についてからゆっくりと読む。

「まずは退院おめでとう、がんばって学校いくのよ、元気が一番なんだからね？実は行成君に謝らないといけないことがあるの。私、生まれたときから心臓が弱くて、ほとんど入院生活を送っているの、医者にもよく言われるわ、いつ死んでもおかしくないって。医者がそんなこといっていいのかって思っちゃうよね。でもまだ死んだわけでもないの、安心してください。行成君がこれを読んでいる頃、私は東京の大病院に向かっているはずですよ。今更無駄なのにね。何回も病院をかえても、だめだって事は私が一番わかってるから。病院移る前に、行成君に会えてよかったよ。友達なんて、私にはほんでもないから…。すごく楽しかったよ。またいつか、会えたらいいね。ん…あはは、少し涙出ちゃったよ。涙もろくてだめだね私。それじゃまたね。小雪より」

僕は泣いていた。手紙を握り締め、ただただ泣いていた。彼女の落ち着いたふんいきが分かった気がした。一日一日を、死の恐怖に怯えながら生きている彼女。僕なんかとは比べ物にならなかった。それから僕は医者を目指すことにした。苦しんでる人を助けたかった、それに…。

タラリラ〜という着信音で、僕は現実に戻される。この着信音は、特別な人のもなので、出ないわけにはいかない。「はい。うん、今片付けてますよ。やっとですよ、長かった…。はい、分かりました。それじゃまた」僕は電話を切る。さて片付けるか。思い出の品は全部持っていく、あの手紙ももちろんだ。久しぶりに…読んであげよ

う、きつと驚くだろう。僕はかなりにやけながら、片づけを始めた。苦しんでる人を助けたかった、それに…小雪さんのそばにいれるから。それが僕が、医者になる理由だ。

(後書き)

地味に書いてなかったりするこれのサイドストーリーなんかもあるんですが、文中に書く機会見失ったんですよええ…まあ完結ということですいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1350b/>

memory

2011年10月3日17時06分発行